

日本新聞協会・毎日新聞社 御中

記：「委縮というコトバ」

新聞に印刷されている文字について述べます。大相撲記事で気づきましたが、「大ノ国委縮」とある。迂闊な手違いかと思って見過ごしていたが、大きな見出しでも「委縮」とある。驚いて子供たちに聞くと、この新聞の字は間違っている、学校では正しく習っていると言います。そこで注意してみると、これに類する当て字が他にも目につきます。この異様に慌てて毎日新聞に尋ねると、貴協会から新聞活字は指定されていて、その指定以外には使えないと説明を受けました。

新聞当て字を正字に改めねばならないと考える理由を述べます。今日の漢字問題の賛否はほとんど「簡単で使いやすければよい」対「日本の美しい文字を残せ」に集約されるようです。述べる理由はこういった気分感情に関わることはありません。

気分やムードや美は美術や音楽で分かるとおり、必ずしもコトバを必要とせず知覚し得る（必要でないのは語句言語ですが、ここではこうさせてください）。ところがコトバがなければ、ヒトが決してなし得ないことがあります。「考えること」です。コトバがなければ複雑なことは言うに及ばず、「もの」を「もの」と知ることさへできません。「緑」を「緑」と知ることもできない。コトバがなくても緑は分かるというかも知れませんが、「緑」であって他の色ではないと分かるのは「緑」と名づけたからです。さらに色なるものについて言えば、「色」というコトバで「形」「重さ」「高さ」ではない色なるものを認め得たから、「色」を「色」と知っているのです。体感できる具体的事象でさへ、こうなのですから、幸福・勇気・見識・思考といった抽象概念は、コトバなくしてはあり得ません。実情に則して言えば、コトバを見つけたときにその観念は発見されるのです。そこで次のことが分かります。コトバはそうとしか表せないものを、そう表した。つまり、表現は内容にひとしい。

ここで当て字を考えます。威風・遺風・異風の内容の違いは見て取れます。イフウ堂々が違います。この違いを知ることが、知らないことより水準は高い。違う物の区別がつかないことは水準が低い。肺結核と肺ガンを区別できないように。I と you を ah, ah と一緒にしてしまうのは赤ん坊です。

脇道へ逸れるが、コトバは時代・地域・使い手で新しく変わるという指摘があります。この指摘の意味は、一つの同じ内容が別の語で表わされるということです。「緑」と「green」、「you」と「thou」、「わたし」と「わっち」、「癌」と「cancer」、「帯状疱疹」と「オビクサ」などがその例。時代によっては「緑」が死語となり「verde」が大手を振って歩くかも知れません。もしかすると新語になるかも知れない。それはそれで構わない。時代や地域で変わるとは、この意味です。

本道に戻ります。夏の木の色をあの色と認めることは、あの色を血の色と違う色と認めることと同時にです。この二つは違うのだから違うコトバです。今日たまたま木の色が緑で血が赤であるだけです。さきゆき緑は他の語に変わるかも知れません。たとえそうでも、その語は決して血の色を表すことになりません。なったとしたら、ヒトが木と血を同じ色と見てしまう生物になったということです。

ここまでくると、当て字を改める理由をお分かりいただけたと存じます。「萎縮」は決して「委縮」ではありません。「委ねる」のような多くの抽象概念を創出したから、ヒトの営為は高いのです。「委員」は「委ねられた者」であって、「萎えた者」ではないでしょう。「萎える」と「委ねる」というまるで違うことを一緒にしてしまうのも、「萎える」のを「委ねる」と間違えるのも、ただならぬ所業です。大ノ国は千代の富士に任せて引き下がったわけではありません。

これは深刻です。萎・委・威・遺を同じコトバにしてしまうのは、この違いを分からなかった遠い昔に戻して、違うコトバを発見する長い道程を今から強要するにひとしい。新聞を読む小中高校生に強要しているのです。発見するまでに長い時間がまたかかり、それまで彼らの思考は貧弱で感情も浅い低迷という混乱がつづくことになりません。

どだい日本語は中国から拝借の借りっぱなしで、高度な抽象概念を創出したこともないので、勇気と無謀、社会と世間、自由と放縦などの区別を発見していないから、低乱を低乱とも気づかずに小さな感情生活を続ける事から飛躍できないでいる、と考えて新聞が意図して拝借コトバを捨てる途方もない革命を目論んでいるなら、目論みの意味はそれなりに理解できます。見受けるところ、その意図の当て字とも思えません。

問題は本質的です。正字に改めねばならないと信じます。貴協会と貴新聞の見識（死語ではない）を期待して、果断されることを望みます。

1988/8/19

*日本新聞協会からも毎日新聞社からも何も返信はなかった。当て字もひらがな書き（こん虫や、ら致のような）も平然とつづいた。ところが昨今どういう風の吹き回しか、新聞に「萎縮」の活字が見られるようになった。もう4分の1世紀も経っている。（2012.05.07）